

# 国語

## 第5回 (1月)

テスト 時間	50分
-----------	-----

平均点 (都標準)	58点
--------------	-----

問題番号	正答率	問題番号	正答率	問題番号	正答率			
1	(1)	95.3	3	[問1]	71.4	5	[問1]	29.7
	(2)	95.4		[問2]	77.4		[問2]	50.1
	(3)	93.3		[問3]	82.4		[問3]	22.7
	(4)	65.8		[問4]	12.5		[問4]	52.8
	(5)	83.7		[問5]	60.8		[問5]	41.4
2	(1)	96.3	4	[問1]	64.0			
	(2)	63.6		[問2]	48.2			
	(3)	54.2		[問3]	62.1			
	(4)	74.9		[問4]	70.5			
	(5)	34.6		[問5]	3.3点			

注：4[問5]の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 記念の品を贈呈した。
- (2) 馬を華麗に乗りこなした。
- (3) 進路について悩んで葛藤する。
- (4) 手土産を携えて友人の家を訪ねる。
- (5) 近所の大学生を昔から兄のように慕っている。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 筆箱に鉛筆を入れワスれた。
- (2) 冷たいご飯をせいろでムす。
- (3) 新人王のコウホに推薦された。
- (4) 文章の一部がショウリヤクされていた。
- (5) コンクールの優勝者の歌唱力はアツカンだった。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

亜樹は中学三年生で、二つ年上の姉いつみがいる。いつみは、スタイリストになるため高校を中退してアメリカに留学したいと宣言して母光枝と衝突し、家出をしてしまった。三日後、亜樹と母は、いつみを迎えに、母の妹である千秋のマンションに行った。

「あのさあ、光枝ちゃんだって、昔、デザイナーになりたいっていったよねえ」

みんなが、ポカンとして千秋ちゃんに注目した。

それは、初めてきく話だった。

「でも、お母ちゃんに反対されて、あっさりあきらめてたよねえ」

亜樹は、孫の自分やお姉ちゃんにもきびしい、こわいほうのおばあちゃんの顔を思いうかべた。千秋ちゃんなんて自分の母親なのに、もう何年も会っていない。おばあちゃんは、千秋ちゃんが結婚もしないで気ままに生きてることを怒っているし、千秋ちゃんはイラストを描いてることを「仕事」として認めてくれないおばあちゃんに腹を立てている。ふたりの関係は平行線のまま、このままずっとよくなりそうもない。

「光枝ちゃんは、いつみや亜樹にも、やりたいことをあきらめさせたいのお?」

千秋ちゃんのいい方はすごくいじわるな感じだった。

「光枝ちゃんも、お母ちゃんと同じことするんだあ」

好きなことを仕事にしている千秋ちゃんは、どうせん、お姉ちゃんの味方だった。

「っていうか、そもそも光枝ちゃんは、どうしてかんとんにデザイナーに

なるのあきらめたのお？」

「けど、千秋ちゃんはお姉ちゃんのために、口だしをしているわけじゃないわ。なさそうだった。」

「本当になりたかったら、お母ちゃんなんか放って、わたしみたいに家出して、バイトしながら夢を叶えることだってできたわけじゃない？」

「いじわるの予先が、いつのまにかお母さんの過去にうつっている。」

「夢をかんとんにあきらめた光枝ちゃんに、いつみの夢をじゃまする権利なんかないと思うよ。いくら、母親でもね」

こんなふうにお母さんにケンカを売る千秋ちゃんを、亜樹は初めて見た。だって、千秋ちゃんとお母さんはずっと、なかよし姉妹だと思っていた。

わざわざ近所のマンションに住んで、家にだって気軽に遊びにくるし、なんだかんだいっても、めいっ子である亜樹たちをかわいがってくれている。

亜樹はそんなふたりを見て、姉妹はなかよしなら最強だと思っていたのだ。いつか、自分もお姉ちゃんとそんなふうになれたらいいのにと、憧れるくらいに。

「けど今、千秋ちゃんはお母さんを責めている。夢をあきらめたことと、今まさにお姉ちゃんの夢をあきらめさせようとしているお母さんに、怒りをぶつけている。」

「デザイナーをあきらめたのは、お母ちゃんに反対されたからじゃないわ」

そんな千秋ちゃんに、お母さんはどうせんヒステリックに反論すると思っていた。

「千秋みたいに、お母ちゃんに反抗してまで、自分の夢を追いたいって思

わなかっただけよ」

だからお母さんのしずかな口調は意外だった。

「わたしはお母ちゃんのことを好きだったから」

それはひらきなおつてるといふより自分の選択に、自信があるかのようなくぶりだった。

「お母ちゃんをかなしませるようなことはしたくなかったの」

お母さんはきっぱりといいのけた。

「わたしはあくまで大事なほうをえらんだだけよ」

(1) 「それが、おかしいっていうの！」

そこで千秋ちゃんが大声をだした。

「なんでお母ちゃんをとるわけ？ 自分の人生でしょ？ 自分の人生とお母ちゃんをてんびんにかけること自体まちがってるの！」

興奮して、声が裏返っている。

「なんでそのおかしなことに気がつかないの？ 自分の人生をお母ちゃんにささげるなんて、絶対に変だよ！」

いつもふざけてばかりの千秋ちゃんが、こんなふう怒りくるう姿を見るのも、初めてだった。

「変でもいいのよ！」

そのせいか、冷静だったお母さんも大声でいい返した。

「まちがっててもいいの！ わたしはお母ちゃんにきらわれたくなかったの！ 好きでいてもらいたかったの！ わたしにとってはそれがなにより大事だったのよ！ 末っ子でわがままに育てられたあなたに、わたしの気持ちなんてわからないわ！」

お母さんはそうどなりちらすと、怒った顔のまま千秋ちゃんから顔をそらした。千秋ちゃんも不満そうな顔でお母さんから目をそらしている。

そうして、しばらく気まずい沈黙が流れた。だれもなにもいおうとしない。亜樹もうつむいて、ただじっとだれかがうごきだすのを待った。

「いくよ」

気がつくとお姉ちゃんが亜樹の前に立っていた。おどろいてお姉ちゃんを見あげると「いいから」といって、腕をつかんでくる。そして亜樹はそのままお姉ちゃんにひきずられるようにして、千秋ちゃんの部屋をでた。マンションをでると外は雪がふるんじゃないかと思うくらいに寒かった。お姉ちゃんはコートも着てない。

「お姉ちゃん、だいじょうぶ？ マフラー貸そうか？」

亜樹の言葉にお姉ちゃんはだまって首を横にふった。そのかわりみたい

に急に立ちどまると、お姉ちゃんは亜樹の腕をつかんでいた手を放した。

「あんた、お母さんにきらわれてるって思ったことある？」  
いっしょになって立ちどまった亜樹は、ちよつと考えてから、首を横にふった。

しかられたり、八つ当たりされたり、嫌味をいわれたりしたことはいくらかもある。むちゃくちゃなことをいわれて、お母さんってほんとわけわかんないと思うことも多い。だけど、お母さんにきらわれてると思ったことはなかったから。

「わたしもないよ」

お姉ちゃんは腕ぐみをして、大きく息を吐いた。

「どんなにケンカしても、きらわれるとか、見捨てられるっていう心配は

したことがない。こうして家出しても、そういう心配だけはしたことな

い」

(2) 少しかなしそうな表情で、お姉ちゃんはそういいきった。

「安心してお母さんに反抗できるって、もしかしてもものすごく幸せなことかもしれないね」

亜樹はだまっとうなずいたけれど、本当はよくわからなかった。

デザイナーになることをあきらめた理由がおばあちゃんにきらわれたくないからだなんて、亜樹にはどうにも理解できなかった。

お姉ちゃんのいうとおり、そんなお母さんを理解できないくらい、自分は幸せなのかもしれないと思った。

(3) 「だから、わたしはあきらめないよ」

その強い口調に、亜樹は考えこんで、いつのまにかうつむき加減になっていた顔を起こした。

「わたしはニューヨークに行くよ。生きたい場所ややりたいことが、やっ

と見つかったんだもの。わたしは絶対にあきらめない」  
お姉ちゃんの宣言に、亜樹はうなずきながらも、ずっときいてみたかったことをたずねた。

「それって、どうやって見つけたの？」

「どうやってって？」

お姉ちゃんは、家のほうへと歩きだしていた。

「なにをしたら、自分が将来なりたいたいものって見つかるの？」

亜樹はあわててお姉ちゃんのあとを追った。

「見つけるんじゃないよ。気づいただけだよ」

「気づく？」

亜樹はますますわからなくなった。

「本を読んだり、テレビや映画を見たり、友だちと話したりしてるときに、自分の気持ちがゆきまぶられる瞬間をのがさないようにしただけ」

「じぶんのきもち……」

亜樹はゆっくりくり返した。

「そう。わたしはこういうの好きとか、興味ないとか、おもしろくないとか、みんなうなずいてるけどわたしはうなずけないとか、とにかく自分の気持ちを注意深く見てあげるのが」

お姉ちゃんは亜樹のほうをふりむくことなく、ずんずん歩いていった。

「そしたら、自分に気づける。なにが好きなのか。どうしたいのか。どんなふうに生きたいのか」

それでも亜樹の疑問に、まじめにこたえてくれていた。ちゃんと、おしえてくれた。

<sup>(4)</sup>「わたしも、いつか気づけるかなあ」

亜樹はうれしくて、思わずお姉ちゃんの腕をとった。なんだか小さいときみたいに、手をつないで並んで歩きたい気分になったから。

「それは、あんた次第だから、知らない」

その返事はいつものつれないお姉ちゃんらしくて、亜樹をこっそり笑わせた。

「そうだね」

亜樹はうれしそうな声にならないようにいった。

そのあと、ふたりはもうなにもしゃべらなかつた。<sup>(5)</sup>「だけど、お姉ちゃん

は亜樹がつかんでる腕を、ふりはらったりしなかつた。早足のお姉ちゃんについていくために、亜樹はときどき小走りしなければならなかつたけれど、家につくまでふたりはいっしょに歩いた。亜樹は半歩先を歩くお姉ちゃんの横顔をときどき見あげながら、うれしい気持ちで家まで歩いた。

(草野たき「リボン」ポプラ社 による)

〔問1〕<sup>(1)</sup>「それが、おかしいっていうの！」そこで千秋ちゃんが大声をだした。とあるが、この表現から読み取れる千秋の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア いつみの夢を応援しようとしたのに、光枝から理路整然と反論されて返す言葉がなくなり、感情的になっている様子。

イ 自分の選択を正当化し、いつみにも同様の選択をさせようとしている光枝の身勝手さに腹を立て、逆上している様子。

ウ かつての自分の選択を悔やむどころか、正しい選択だったと言い切る光枝の愚かさがもどかしく、いらだっている様子。

エ 他人の夢を見下した光枝の言葉を不快に思い、これまで光枝に対してひそかに抱いていた不満が爆発している様子。

〔問2〕<sup>(2)</sup>「少しかなしそうな表情で、お姉ちゃんはそういいきつた。とあるが、いつみが「少しかなしそうな表情」をしたわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 祖母から無条件に愛されているという実感を得られず、安心して反抗することができなかった母の生き方を思い、切なくなったから。

イ デザイナーになるという夢をもちながら、祖母に反抗する勇気ももて

なかつたばかりに夢をあきらめた母を、情けないと思ったから。

ウ いつも仲が良く理想的な姉妹だと思っていた母と千秋が、互いに相手に対する不満を抱えていたことを知って、むなしくなったから。

エ やつと自分のやりたいことが見つかったのに、自分がその夢を追い求めれば母を失望させることになるかと分かり、胸が痛んだから。

〔問3〕<sup>(3)</sup>「だから、わたしはあきらめないよ」とあるが、このときのいつみの気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア デザイナーになる夢をあきらめざるをえなかった母のために、どんな困難があろうと、夢を追い続けようと思っている。

イ 祖母に反対されて夢をあきらめた母の生き方を不幸だと思い、自分は夢を叶えて幸せな人生を送りたいと願っている。

ウ 夢を追いたいという自分の気持ちを抑えることができず、たとえ母にきらわれたとしても、留学しようと思心している。

エ どんな道を選ぼうと、母からきらわれることはないと思心から思えるからこそ、夢を追い求めようと強く心に誓っている。

〔問4〕<sup>(4)</sup>「わたしも、いつか気づけるかなあ」亜樹はうれしくて、思わずお姉ちゃんの腕をとった。とあるが、このときの亜樹が自分の気持ちをいつみに伝えるとしたら、どのように言うか。亜樹の話す言葉を四十字以上五十字以内でまとめて書け。なお、や。なども、それぞれ字数に数えよ。

〔問5〕<sup>(5)</sup>「ただ、お姉ちゃんは亜樹がつかんでる腕を、ふりはらったりしなかつた。早足のお姉ちゃんについていくために、亜樹はときどき小走りしなければならなかつたけれど、家につくまでふたりはいっしょに歩いた。」とあるが、この表現について述べたものとして最も

適切なのは、次のうちではどれか。

ア 夢を追い求める姿勢がいつみと亜樹とは大きく異なっている様子を、二人の歩き方を描き分けることによって対照的に表現している。

イ 苦しくても夢を追い続けるいつみの様子と、その生き方に憧れて目標にしている亜樹の様子を、たとえを用いて暗示的に表現している。

ウ いつみと亜樹が心を通い合わせ、互いに協力して夢を追い求める様子を、二人の歩く姿をありのままに描くことで明確に表現している。

エ いつみと亜樹の心を通い合い、進度は違うものの共に前向きに人生を進んでいく様子を、二人の歩く姿を重ねて象徴的に表現している。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

君たちも地球温暖化についてはよく知っていると思う。CO<sub>2</sub>、すなわち二酸化炭素が増えたせいで、地球上の温度が上昇しているといわれている問題だ。実は、この「CO<sub>2</sub>原因説」は、九〇%までは正しいと認められているのだが、あとの一〇%の部分はまだ懐疑的にみられているということを知っていたらどうか。要するに、九〇%までは説明できても、一〇%はまだ説明できない要素があるのだ。ところが、その一〇%を目をつぶり、一方的に判定を下してしまっている人も多い。その説明できない要素のほうに、もっと重要な問題が潜んでいる可能性があるにもかかわらず、(第一段)

逆に、その一〇%の懐疑に目を付けて、CO<sub>2</sub>が地球温暖化の原因ではないと主張する人もいる。これがエスカレートすると、「根拠がないのだから手を打つ必要がない」という口実から、「CO<sub>2</sub>削減はナンセンスだ」という居直り論法に発展する場合もある。実際、フロン<sup>\*</sup>の製造・販売を全部禁止するための条約であったモントリオール議定書の調印において、日本国政府は「科学的根拠なし」という理由で拒否をしたことがあった。これは僕の感覚からすれば甚だおかしいと思わざるをえない。明確に証明できないのを理由にして、何もしない口実に使うということは、まさしく二七科学ではないか。(第二段)

現代の科学では明確に答えられない問題はたくさんある。しかし、「答えられない」という現実から目を背け、ある単純な結論を一方的に受け入れてしまうことは、その時点で思考停止に陥ることを意味する。この思考

停止が、科学の世界では一番怖いのだ。(第三段)

実際、この世の中には現代科学では解明しきれない部分のほうが多いかもしれない。<sup>(1)</sup>だからこそ、常に疑い続けなければならぬのであり、そこがまさしく「科学」するということである。安易に結論に飛びつくことは、それがどんなに科学的な内容だったとしても、「二七科学」に転落する可能性を秘めているのだ。(第四段)

では、実際に科学の知識で対処できない問題にはどう立ち向かえばいいか。別の論理を持ち込めばいいのである。すなわち、科学知に限界があることを正確に認識したうえで、科学を軽々しく適用せず、さまざまな角度から慎重に吟味していけばいい。僕がお勧めしたいのは「利益よりも安全を優先する」ということ。それに、「予防のため疑わしきは罰する」<sup>(2)</sup>つまりは「予防措置の原則だ。それに加えて、短期の利益と長期の損失のバランス、欲望の抑制、などなど。そういう、安全に重きを置いた観点が、偏った姿勢や二七科学に陥ることから遠ざけてくれる」。(第五段)

温暖化の問題に戻って考えてみよう。温暖化の原因がたとえ断定できないとしても、その一方で、「化石燃料を使いすぎている」という社会構造が現実存在することをまずは認識する必要がある。化石燃料を使用すれば、必ずCO<sub>2</sub>が発生する。CO<sub>2</sub>に温室効果があるのは明らかにされている。ならば、「疑わしきは罰する」のだ。一〇〇%明確な原因であろうとなかろうと、先を見据えて予防線は張っておかなければならない。ただし、原因の追究そのものは当然のことながら続けていくこと。あくまで疑い続けることが大切である。(第六段)

なぜ二七科学がこんなにも世の中に広がっているのか。(第七段)

その一つとして、科学に対する極端な態度がある。すなわち、科学を信仰するか、科学を否定するか。科学の力を信じるあまり、道理もわからず丸ごと飲み込んでしまう場合と、科学への不信や不満が高じて、道理から目を背けてしまう場合。この両者は、まったく正反対のように見えて、実は非常によく似ている。どちらも批判の目を欠くことによって、科学的思考から遠ざかってしまうのだ。(第八段)

それから、二つ目が観客民主主義というもの。小泉内閣が発足した当時、「劇場型政治」という言葉が流行<sup>はや</sup>ったが、ニセ科学の蔓延<sup>まんえん</sup>はまさしくそれに当たる。現代人は他人に「お任せ」してしまう発想が非常に強い。例えば、「テレビで放送されていたから〇〇は効き目がある」「専門家も同じことを言っていたから安心」という発想はその典型だ。しかし、他人任せで自分の考えを放棄してしまつたら、それがどんな内容でも科学ではなくなる。常に自分で考える姿勢が不可欠。(第九段)

三つ目は、科学リテラシーの欠如。すなわち科学の知識や規範が欠けている。これは同時に、懐疑精神が欠如しているという意味でもある。何度も述べているように、科学者ほど疑<sup>えい</sup>ぐり深い人間はいないのである。科学者ほど自分の科学について疑い続けている人間はいない。なぜならば、疑い続けていくことが科学にとって最も大事だからである。(第十段)

四つ目に、時間が加速していることが挙げられる。現代人はどんどん忙しくなっているが、その結果、早く結論を出したがる傾向を持ってしまう。例えばある事件で容疑者が捕まったとき、その容疑の真偽にかかわらず、早く犯人だと断定してほしいという気持ちがどうしても生じる。そうすることによって安心したいのだ。つまり、一刻も早く結論を得ようとし

て、簡単に安易な結論に飛びついてしまうのである。時間が加速されているとはそういうことだ。これは非常にまずいことだ。私たちは時間をもつと無駄に使うことが必要ではないかと思う。君たち若い世代には、まだまだ時間がたくさんあるはずだ。性急すぎる判断で取り返しのつかないことを招く前に、ちょっと立ち止まって考えてみてほしい。(第十一段)

そして最後に、欲望の爆発。人間は利益や便利さ、豊かさというものをとめどもなく求めてしまう。実は、こういう欲望を爆発させているのは、高度成長期に生きてきた僕たちみたいな中年世代なのだ。君たち若い世代のほうが、例えば環境に対する配慮というのを早い段階から考え始めている。だから、この部分に関しては特に君たちに期待している。過剰な欲望に惑わされることなく、この社会を科学的なまなざしで見つめてほしい。(第十二段)

おそらくニセ科学は今後も廃れない。それは、ここまで述べてきたように、人間の欲望や心のゆらぎに密接に絡<sup>から</sup>みついているからである。しかし、その処方箋ならいくつ提案することができる。(第十三段)

中でも最も大切なのは、「なぜ？」という、懐疑の精神をしっかり教育することだ。現代の学校教育においては、合理的な内容は教えているけれど、不合理についてはまったく教えない。<sup>③</sup>これは非常に危険なことである。本来なら、不合理なものをあえて見せて、「なぜこれは不合理なのか」ということを考える力を身に付ける必要があるのだ。合理的なものばかり教えていると、正しいことにしか対応できない人間に育ってしまう。つまり、不合理も教えておかないと、ニセ科学に出会ったときに対処の仕方がわからなくなってしまうのである。そういう意味では、不合理への免疫を今の

うちにつけておくことが肝要だ。(第十四段)

(池内 了「それは、本当に『科学』なの?」による)

〔注〕ニセ科学——科学のようで科学でないもの。本書で筆者は、

「ニセ科学」の例として、血液型占い、超能力、マ  
イナスイオン、ある種の健康食品などを挙げている。

観客民主主義——国民が主体的に政治に参加せず、政治家や政  
治評論家に任せて傍観していること。

劇場型政治——単純明快なキャッチフレーズを掲げて、マスメ  
ディアを通じて広く大衆に支持を訴える政治手法。

〔問1〕だからこそ、常に疑い続けなければならないのであり、それこそ

がまさしく「科学」するということである。とあるが、『科学』す

る」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 科学では対処できない問題があるとあきらめることなく、状況を正確  
に認識し、さまざまな角度から科学を適用して利益を守ること。

イ 科学知に限界があるという現実を踏まえて、地球温暖化の原因を二酸  
化炭素とする説を疑問視し、正しいかどうかを慎重に判断すること。

ウ 目先の利益や便利さに惑わされたり、性急に安易な結論を受け入れた  
りせず、常に疑いの目で問題を見つめ、自分の頭で考えていくこと。

エ 利便性や豊かさを求めて科学の成果を安易に受け入れるのではなく、  
科学を環境への配慮に役立てるよう、科学者に働きかけていくこと。

〔問2〕<sup>(2)</sup> つまりは予防措置の原則だ。とあるが、「予防措置の原則」とは  
どういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 現代科学で解明しきれない問題については安全に重きを置いた観点で  
対処し、科学的な根拠そのものは追究しないようにすること。

イ 現代科学で解明しきれない問題については安全を優先し、危険性が疑  
われるものについては、それを避ける策を講じておくこと。

ウ 現代科学で解明しきれない問題については原因を一つに特定せず、疑  
わしい点があるものは全て原因であると結論づけること。

エ 現代科学で解明しきれない問題に対しては科学的な観点から原因を追  
究せず、別の論理を適用して問題の解決を図ってみること。

〔問3〕この文章の構成における第六段の役割を説明したものとして最も  
適切なものは、次のうちではどれか。

ア 第五段で述べた内容を受けて、多くの例を挙げてさまざまな解決策を  
示している。

イ 第五段で述べた内容について、具体的な例を示して論旨を分かりやす  
く説明している。

ウ それまでの段落で述べた内容に基づいて、新しい観点から例を挙げて  
話題を転換している。

エ それまでの段落で述べた内容に対して、例を挙げて反論することで自  
説の妥当性を強調している。

〔問4〕<sup>(3)</sup> これは非常に危険なことである。とあるが、筆者がこのように述  
べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 不合理なものから目を背けて、合理的なものばかり教えていると、正  
しいことに対応できない人間に育ってしまうと考えたから。

イ 不合理なものをまったく教えないと、懐疑の精神が育たず、科学知に

限界があることを認識できなくなってしまおうと考えたから。

ウ 合理的なものばかり教えていると、なぜ不合理なのかを考える力が身につかず、正しい科学が育たなくなってしまおうと考えたから。

エ 合理的なものばかり教えていると、懐疑の精神が育たず、ニセ科学に出会っても適切に対処できなくなってしまおうと考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「ニセ科学への対処」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて**二百字以内**で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、**、や・や**なども、それぞれ字数に数えよ。

次のAは「鹿柴（王維作）」という漢詩の原文と書き下し文及びその通釈であり、Bはその漢詩に関する対談である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

A 空山不見人

空山 人を見ず

(1) 但聞人語響

但だ人語の響きを聞く

返景入深林

返景 深林に入り

復照青苔上

復た照らす 青苔の上

《通釈》静かな山に、人の姿は見え、ただことばの響きが聞こえるばかり。

夕陽の光が深い林の中に分け入って、青い苔を照らし出す。

B 石川 さて、詩の前半では、シーンとした山に人の姿は見えないが、声

だけがするといっています。次の「返景」というのは夕日の光のことです。夕日の光が深い森の中に入り込んで、青い苔の上を照らす、というのが後半です。昼間の上からの日の光は深い森の中には入りませんが、夕方の横から入る光は斜めに入ります。そのわずかな時間だけ、森の奥にある青い苔が照らし出される。そのえもいわれぬ美しい世界を描いているんです。

この情景は(2)いったい何を意味しているのか。私は、この詩も例の「隔離の詩想」で、鹿を防ぐ柵が境になって、向こうは俗世間、こちららは超俗世界、そういう意味を持つんじゃないかと考えます。超俗世界にしか見られない、普通の人には見ることができない秘密の美の世界

界をうたうのが狙いだと思っています。

中西 まずお伺いしたいのは、詩の前半ですが、「空山人を見ず」といいながら人がいるとなると、人が邪魔になります。だれもいない、自分がしゃべっている声だけが響くという理解はできないんでしょうか。

石川 そうすると、話し相手がいるということになりませんか？

中西 確かにそうですね。連れ立って散歩をしているということになりません。ただ、「人語」は「他人の声」ではなくて「人間の声」。

石川 その可能性もありますね。ただ、なぜここで「響」という字を使ったのか。人のことばを「響き」と取るというのは、普通の発想にはないですね。これには元になったと思われるものがありまして、

謝靈運の詩の中に「林深ければ響き奔り易し」という句があるんです。

中西 その句、だいぶ前に出てきましたね。

石川 ずっと森の奥のほうで、だれかがしゃべってる、それがずっと伝わる。王維は、人語の「響」という字を使うことによって、謝靈運のあの句を思い出せという信号を発していると思うんです。次の句には「返景 深林に入り」とあって、「林が深い」といっています。さらにもう一つ、「林深ければ響き走りやすし」と対句をなすのが「崖傾いて光留め難し」という句です。がけが傾いていると、光が当たってもじっとしてない。これが「復た照らす 青苔の上」に関係があると思うんです。だから明らかにこれは、謝靈運のこの句を意識してるんです。

中西 どうも、しゃべっているのは自分だとする方が、私にはぴんと来ます。

石川 なるほどね。その可能性は確かにありますね。

中西 連れ立って散歩していても、あるいは自分一人だけでも、何か声を出してみれば響きとして聞こえてくる、ことが音響になる。

石川 問題はどちらの解釈がおもしろいかということになりますね。私は、森の奥にいる人は隠者と木こりであろうと思うんです。なぜかという、今度は陶淵明（\*トウエンメイ）の句です。陶淵明に、「相見て雑言（ざつごん）無し、但（た）だ道（い）う桑麻（さうま）長びたり」、お互いに顔を合わせて、ほかのことは何もいわない、桑や麻が伸びたということしかいわないという句があります。

この句を念頭に置きますと、森の奥で隠者と木こりがしゃべっている、これは俗世間の話じゃない。たとえば、今年のキノコはどうかねとか、ウサギは太ってるかねとか、こういう話をしてるんじゃないかと、捉えるんです。

中西 <sup>(4)</sup> そういう詩のイメージの堆積（たいせき）というものから、われわれ読者は自由にはなれないですよ。ですから、イメージの積み重ねによる解釈というものは、詩の世界には、良くも悪くも必然的にくっついてるもんだという気がします。でもそれはそれとして、この詩を単独で読みますと、声を出しても響きとして響くだけでも読めますし、そう読んだとしても、その話の内容は、やっぱり政治を論じるなんていうのではなく、それこそウサギは太ったかねでもいいんですけど、同じようなイメージになってくると思うんです。

石川 しゃべっている一人を自分とするのも確かに成り立ちますね。詩のおもしろみは変わらないと思いますよ。

中西 ところで、季節はいつなんでしょうかね、この詩。

石川 秋じゃないかなと思うんですけども、何とも分かりません。「空山」ということばは、葉を落とした秋の山のこともいいです。ただどこではそうじゃない。こんもりと茂っているということは、後のほうで分かりますから、この「空山」はシーンとした山で、季節ではないですね。

中西 秋の詩だと考えますと、「深林」には紅葉の色が出てきますよね。そこにツタなんか絡（から）まっていて、それも色づいているとか、いつそうカラフルになりますね。

石川 その可能性もありますね。

中西 「青苔」とわざわざ「青」という字を使っていますが、この「青」というのは、この場合はどんなイメージなんですか。

石川 これは澄んだ色です。「さんずい」を付けて、「清い」になる。非常に澄んだ青色。

中西 「青」というのは「さんずい」がなくても、すがすがしいという意味で使うことばですか。

石川 漢字の世界には、単語家族、ワードファミリーという考え方があって、簡単にいうと、つくりが同じ漢字には意味の共通性があるんです。たとえば「青」は、「日」を付ければ「晴」で澄んだ空、「目」を付けると「晴」で、澄んだ瞳になる。つまり、「青」が「澄んだ」というような意味を持っているんです。だから、「緑苔」ということばもあります。ここではそれではつやが出ちゃって、駄目なんです。

中西 それはよく分かりますね。けばけばしいものの排除ですね。

「緑」というのは、日本語でも若々しいという意味ですね。若々しい

黒髪のことを「緑の黒髪」といいますが、中国には、「緑髪」ということばはあるんですか。

石川 ありますね。仙人とか道士の髪の毛をいいますね。女性の髪の毛にも使えますよ。

中西 なるほど若々しいですね。そうすると「青苔」というのは、やはり清らかな苔という意味も併せて理解しないといけませんね。

石川 そうですね。清浄な世界です。

中西 超俗世界ですね。

石川 <sup>(5)</sup>「青苔」ということばもあれば「緑苔」ということばもあるんですから、その中から作者が「青苔」を選んだのには、意図があると思

うんです。実際の色は、やはり苔の色ですから、緑色なんです。でも字面の問題として、イメージが違ってくるんです。

(石川忠久、中西進「石川忠久 中西進の漢詩歎談」による)

〔注〕 鹿柴——鹿の侵入を防ぐ柵。

王維——中国、盛唐時代の詩人。

隔離の詩想——「籬」は「まがき」の意で、竹や柴などで編んだ垣根のこと。石川さんは、まがきは、物理的な

垣根であると同時に、俗世間と自分の超俗世界を隔てる象徴でもあると捉えている。

謝靈運——中国、東晋・宋時代の詩人。

陶淵明——中国、東晋・宋時代の詩人。

〔問1〕 但聞人語響 とあるが、書き下し文に合うように、この句に返り

点をつけよ。

〔問2〕 ② いったい と同じ品詞のものを、本文中の 〓 を付けたア、エの単語から一つ選び、記号で答えよ。

〔問3〕 ③ これが「復た照らす 青苔の上」に関係があると思うんです。とあるが、石川さんが「関係がある」と考えた点をまとめた次の文の ①・

② に当てはまる言葉を、① は二字、② は一単語でそれぞれ B の文章中からそのまま抜き出して書け。

「復た照らす 青苔の上」は、夕方になって森の中に ① に入り込むようになるわずかな時間だけ、青い苔が照らし出されるという、② の加減が刻々と変化していくことに着目している点。

〔問4〕 ④ そういう詩のイメージの堆積というものから、われわれ読者は自由にはなれないですよ。という中西さんの発言は、それまでの石

川さんの発言をどのように受け止め、どのような意図で発言したのかを説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 先人の詩のイメージを重ねて詩を解釈することに違和感を覚え、詩を単独で解釈するほうが妥当であることを示そうとしている。

イ 先人の詩のイメージを重ねて詩を解釈することの必然性を認める一方、それとは異なる解釈の仕方でも可能であることを示そうとしている。

ウ 詩にはいくつものイメージが積み重なっているという解釈に共感し、論点を整理して、その解釈の妥当性を確認しようとしている。

エ いろいろなイメージを積み重ねながら詩を解釈することに興味を覚え、  
具体的にどんなイメージが重なっているかを確認しようとしている。

〔問5〕「青苔」<sup>(5)</sup>ということばもあれば「緑苔」ということばもあるんです

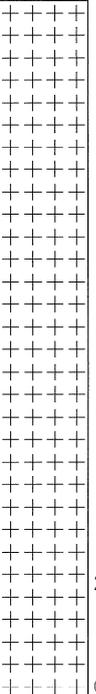
から、その中から作者が「青苔」を選んだのには、意図があると思  
うんです。とあるが、石川さんほどのような意図で作者が「青苔」  
を選んだと考えているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア 俗世間では見られない、清らかで美しい世界を表現しようという意図。
- イ けばけばしいものを排除し、落ち着いた世界を表現しようという意図。
- ウ 沈む夕陽と対比される、若々しく清浄な世界を表現しようという意図。
- エ 晴天の空を連想させる、清く晴れやかな世界を表現しようという意図。

## 《国 語》

偏差値	第1回 (9月)	第2回 (10月)	第3回 (11月)	第4回 (12月)	第5回 (1月)
76	96	95		97	96
75	94	94		96	94
74	92	93	100	94	93
73	91	92	98	93	92
72	89	91	97	92	90
71	87	90	96	91	89
70	85	88	95	89	88
69	84	87	93	88	87
68	82	85	92	87	86
67	80	84	90	86	85
66	78	82	88	84	84
65	77	80	86	82	82
64	75	79	85	81	80
63	73	77	83	79	79
62	72	75	81	77	77
61	70	74	79	76	76
60	68	72	77	74	74
59	66	70	76	72	72
58	65	69	74	71	71
57	63	67	72	69	69
56	61	66	70	68	67
55	59	64	69	66	66
54	58	62	67	64	64
53	56	61	65	63	63
52	54	59	63	61	61
51	52	57	61	59	59
50	51	56	60	58	58
49	49	54	58	56	56
48	47	52	56	54	54
47	45	51	54	53	53
46	44	49	52	51	51
45	42	47	51	49	50
44	40	46	49	48	48
43	38	44	47	46	46
42	37	43	45	45	45
41	35	41	44	43	43
40	33	39	42	41	41
39	31	38	40	40	40
38	30	36	38	38	38
37	28	34	36	36	37
36	26	33	35	35	35
35	25	31	33	33	33
34	23	29	31	31	32
33	21	28	29	30	30
32	19	26	28	28	29
31	18	25	26	27	27
30	16	23	24	25	25
29	14	21	22	23	24
28	12	20	20	22	22
27	11	18	19	20	20
26	9	16	17	18	19
25	7	15	15	17	17

第5回  
(1月)



〔解答〕

- ① 2点×10 ③・④〔問1〕・〔問4〕 ⑤ 5点×14 ④〔問5〕 10点
- ① (1) ぞうてい (2) かれい (3) かつとう (4) たずさ(えて)  
 (5) した(つて)
- ② (1) 忘(れた) (2) 蒸(す) (3) 候補 (4) 省略 (5) 圧巻
- ③ 〔問1〕 ウ 〔問2〕 ア 〔問3〕 エ 〔問4〕 きちんと答えてくれてあ  
 りがとう。わたしも自分の気持ちを注意深く見つめてこれからの生き方を考えて  
 みる。(例) 〔問5〕 エ
- ④ 〔問1〕 ウ 〔問2〕 イ 〔問3〕 イ 〔問4〕 エ
- 〔問5〕 別ページの解答例参照
- ⑤ 〔問1〕 但聞 人語響 〔問2〕 ウ 〔問3〕 (1) 斜め・(2) 光(完答) 〔問4〕 イ 〔問5〕 ア

〔解説〕

- ③〔問1〕 初めは皮肉るような口調で問い詰めていた千秋は、自分の夢よりも母親に従う  
 ことが大事だと光枝が言い切るのを聞いて、思わず大声をあげている。こうした口調  
 の変化に、千秋のいらだちが読み取れる。「自分の人生とお母ちゃんをてんびんにか  
 けること自体まちがってる」と考えている千秋は、なぜ光枝は「自分の人生をお母ちゃ  
 んにささげる」ことを変だと思わないのかといたらだち、大声をだしたのである。
- 〔問2〕 光枝は「お母ちゃんにきらわれたくなかった」と言っているが、これは、わがま  
 まを通せばきらわれると感じていたことを表している。一方、いつみは、母から「き  
 らわれるとか、見捨てられるっていう心配はしたことがない」。それを「幸せなこと」  
 だと感じるからこそ、何をしても、どんな自分でも決して母親からきらわれないとい  
 う確信がもてなかった母光枝の心情を思い、切なくなったのだ。
- 〔問3〕 光枝のように、母親からきらわれると思っていたら、安心して反抗することはで  
 きない。しかし、いつみは、自分がどんな選択をしても母からきらわれたり見捨てら  
 れたりしないと確信している。そうした確信があるからこそ、「安心してお母さんに反  
 抗できる」と思い、自分の夢をあきらめないで追い続けようと心に誓っている。
- 〔問4〕 いつみはつれない態度をとっているが、亜樹の疑問にまじめにこたえており、亜  
 樹はいつみが「ちゃんと、おしえてくれた」ことをありがたく思っている。また、「い  
 つか気づけるかなあ」という言葉から、亜樹がいつみの助言を受け止めていることが  
 読み取れる。きちんと答えてくれたことに対する感謝の気持ちと、自分の気持ちを見  
 つめようという思いを話し言葉でまとめる。同趣旨正解。

【採点基準詳細】

- ・実際に会話としてそのまま口にするのできる部分をはっきり示していること。
  - ・文末が「……から(理由を述べる形)」「……」と思っている(気持ちの説明)など、  
 会話文と見なせない表現で終わっているものは×。
  - ・合計5点の内容は、次のようにする。
  - ①自分に対して真摯な対応をしてくれたことに対する気持ちが書いてある→2点。
  - ②「いつか気づけるかなあ」を、これからの自分の生き方に結びつける視点で書いて  
 ある→3点。
- 5点獲得の例
- ・ずっと聞きたかったことが聞けてうれしい。私も自分の気持ちがゆさぶられる瞬間  
 を探したいな。
  - ・ちゃんと教えてくれてうれしい。ずっと知りたかったんだ。私も自分の気持ちにど  
 んなことが好きか聞こう。
- 2点のみの例
- ・私が聞いたことについて真面目に答えてくれてありがとう。私もお姉ちゃんみたい  
 に気づきたいな。(「お姉ちゃんみたいに気づきたい」とあるが、「いつか気づけるか  
 なあ」という設問をなぞっているだけで、気づきの対象である②の要素はなし。)
  - ・お姉ちゃん、私の質問に対してまじめに答え、私の背中を押してくれて本当にあり  
 がとう。(「背中を押してくれて」だけでは気づきの対象にはならず、②の要素は不  
 足。)
  - ・私の質問にまじめに答えてくれてありがとう。お姉ちゃんがその夢を選んだ理由を  
 教えてくれてありがとう。(「お姉ちゃんが選んだ理由」だけでは気づきの対象には  
 ならず、②の要素は不足。)
  - ・どうやって将来なりたいたいものを見つけたのかをずっと聞いてみたかったんだ。教え  
 てくれてありがとう。
- 3点のみの例
- ・ありがとう。わたしもこれから、どういのが好きとか、興味があると感じるのか  
 自分の気持ちを見してみる。(「ありがとう」という表記はあるが、何に対する感謝か  
 が明記されていない。)
  - ・私もおねえちゃんみたいに夢を見つけて新しいことにチャレンジして、将来の夢を  
 実現させたい。
  - ・いつか自分のやりたいことに気づいてお姉ちゃんみたいに生きたい場所ややりたい  
 ことを見つけたいな。
  - ・わたしもお姉ちゃんみたいに自分の気持ちに気づけたらいいな。私もお姉ちゃんみ  
 たいになりたいな。

×の例

・何だかわからないし、ずんずん歩いていってしまいうけど、手をふりはらったりしないで歩いてくれることになってしまっているのよ、「嬉しい」のは、自分を振り払ったりせずに、ただ一緒に歩いてくれることになってしまっているのよ、条件違いで0点。」

・お姉ちゃんは夢をもっていてたくましいな。私もいつかお姉ちゃんみたいになんかたくましくなりたいな。「たくましさ」に感心していることが焦点になっているので、条件違いで0点。」

・私の将来へのアドバイスをしてくれてありがとう。そのおかげで前向きに生きていけると思うよ。(姉のアドバイスによって前向きになれたという話ではないので、条件違いで0点。)

・わたしもお姉ちゃんみたいに夢を見つけたらあきらめないようにする。お姉ちゃんありがとう。(「あきらめない姿勢」を評価している場面ではないので、条件違いで0点。)

〔問5〕 亜樹はいつみの腕をつかみ、いつみはそれをふりはらわず受け入れている。こうした様子に、姉妹の心のつながりが感じられる。また、半歩先を足早に歩くいつみとそれを追うように歩く亜樹の姿は、夢に向かって進み始めたいつみと、まだ夢は見つからないが自分の気持ちと向き合うことから始めようとしている亜樹の姿に重なる。

〔問1〕 筆者は直後に、安易に結論に飛びつくことは「ニセ科学」に陥る可能性がある」と述べており、「科学」と「ニセ科学」を対極のものとして捉えている。したがって、「科学『する』こと＝「ニセ科学」に陥らないようにすること」と置き換えられる。「ニセ科学」に陥らないための方策は、第八段と第十二段で説明されている。ここから「批判の目」「常に自分で考える姿勢」「懐疑精神」を持ち、「性急すぎる判断」を避け、「過剰な欲望」に惑わされないことが必要だという筆者の考えを読み取る。

〔問2〕 筆者は、直前の「利益よりも安全を優先する」と「予防のため疑わしきは罰する」ことを「予防措置の原則」と言い換え、直後の段落で温暖化を例に、温暖化の原因として少しでも疑わなければ、予防線を張っておくべきだと説明している。これらから、「予防措置の原則」とは、科学の知識で対処できない問題については安全を優先し、安全を脅かす恐れがあるものについて予防策を講じておくことだと読み取れる。

〔問3〕 筆者は、第五段で「科学の知識で対処できない問題」にどう立ち向えばよいかを述べ、第六段では、「温暖化の問題」を例に、その趣旨を分かりやすく説明している。

〔問4〕 傍線(3)の後の内容を読み取る。筆者は、合理的なものばかり教えている「なぜ」という懐疑の精神が身につかないため、正しいことにしか対応できなくなり、「ニセ科学」に出会ったときの対処法がわからなくなってしまうと警告している。

〔問5〕 別ページの解答例参照。

〔問1〕 傍線(1)を「但だ人語の響きを聞く」と読むためには、二字目にある「聞」を最

後に読む必要がある。漢文では、二字以上前にさかのぼって読む場合は一・二点を使えばよいので、「聞」の左下に二点、「響」の左下に一点を置く。

〔問2〕 「いったい」とウは副詞。アは連体詞、イは助詞、エは接続詞である。

〔問3〕 「復た照らす 青苔の上」は、言い苔が光に照らされている情景を表すが、これについて石川さんは対談の冒頭で、森の奥にある青い苔が照らされるのは、光が森の中に斜めに入るわずかな時間だけであることを指摘している。つまり、この句は、日が刻々と傾いていき、光が森の中に入らなくなったわずかな時間を捉えた描写であり、光の動きを捉えている点で「崖傾いて光留め難し」と共通している。

〔問4〕 「人語」について、中西さんと石川さんでは解釈の仕方が異なっている。石川さんが、謝霊運や陶淵明の詩のイメージを重ね合わせて、「森の奥で隠者と木こりがしゃべっている」と解釈するのに対して、中西さんは、「イメージの積み重ねによる解釈」の必然性を認めつつ、詩を単独で読んで「自分がしゃべっている」と解釈することも可能で、どちらの解釈でも、詩のイメージは同じであると主張している。

〔問5〕 「青」が「澄んだ」という意味を持つことから、「青苔」という言葉によって「清浄な世界」「超俗世界」が表現されている。また、「超俗世界」について、石川さんは冒頭で、「普通の人には見ることでできない秘密の美の世界」と説明している。



# 国語解答用紙

(1)	[問3]
(2)	
ア イ ウ エ	[問4]
ア イ ウ エ	[問5]

但聞人語響	[問1]
	[問2]

5	ア イ ウ エ	[問1]	4	ア イ ウ エ	[問1]
	ア イ ウ エ	[問2]		ア イ ウ エ	[問2]
	ア イ ウ エ	[問3]		ア イ ウ エ	[問3]
	ア イ ウ エ	[問4]		ア イ ウ エ	[問4]

[問5]  
※作文はウラの原稿用紙に書きなさい。

[問4]				

ア イ ウ エ	[問1]	3	ア イ ウ エ	[問1]
ア イ ウ エ	[問2]		ア イ ウ エ	[問2]
ア イ ウ エ	[問3]		ア イ ウ エ	[問3]

ア イ ウ エ	[問5]
------------------	------

(漢字はくすくすに書きなさい)

れた   す	(1)	ワ ス れ た	2
	(2)	ム	
	(3)	コ ウ ホ	
	(4)	シ ヨ ウ リ ヤ ク	
	(5)	ア ツ カ ン	

(1)	贈 呈	1
(2)	華 麗	
(3)	葛 藤	
(4)	携 え て	
(5)	慕 っ て	

(1), (2) 2点 (3), (4)[問1] ~ [問4], (5) 5点 (4)[問5] 10点

氏名		得点
		点

